

戦禍を超えた師弟愛

——『ウッズウォース追憶集』——

中 島 俊 郎

寿岳文章（1900-92）は英国のロマン派詩人であるウィリアム・ブレイク研究に専心した昭和中期を代表する英文学者であり、滅亡しかけていた手漉き和紙の保存を訴え、正倉院の和紙を調査した和紙研究者であり、また英国から日本に書誌学を導入した第一人者でもあった。加えて読売文学賞に浴したダンテ『神曲』の高名な翻訳者であった。そして質の高い私家版、向日庵本を出す出版人でもあるという多面的な側面をもつ文化人であった。

向日庵本として入手困難なブレイクの詩篇と図版を翻刻した『セルの書』（1933）、『無明の歌』（1935）をはじめ、『紙漉村旅日記』（1940）など多くの私家版が陸続と出された¹⁾。1952年に出た寿岳文章編纂『ウッズウォース追憶集』（*In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D. D.*, 1952）は、向日庵本の掉尾を飾る本となった。だが、『紙漉村旅日記』、『絵本どんきほうて』などと比べてこの追悼集はほとんど注目されず看過されてしまい、どの分野の研究対象にもされてこなかった²⁾。その理由として、向日庵私家版として限定出版されたため、小部数（全300部のうち200部のみ）しか一般には流布しなかったので、まず広範囲にわたり読者を得ることがなかったことをあげなくてはなるまい。そして本文が英語のみで書かれていることも日本人読者への隔壁となり、小数の読者にしか訴えるところがなかったと考えられる。さらに無名に近い外国人教師・牧師の伝記であり、何よりも学校・教会という閉ざされた狭い社会で展開された教育という限定的な内容であるという点が、加えて読者を選択してしまい、読者層をせばめてしまう結果となってしまったことが憾まれる。

だが、ひるがえって寿岳文章という個人に視座をおいてみると、この追悼録は大きな意義をおびてくる。不幸な戦争のため中断を余儀なくされ出版されるまで10年以上の年月をかけざるをえなかった『ウッズウォース追憶集』は、ある意味で戦禍を超えた師弟の物語になっているからだ。寿岳はウッズウォースを誰よりも「いちばんたいせつな恩師」³⁾とみなしていたからであ

る。ダンテ『神曲』はさまざまな解釈を許す古典であるが、師ウエルギリウスが弟子ダンテを導く師弟愛が基軸になっている物語であると考えても何ら問題はないであろう。つまり、『ウッズウォース追憶集』は寿岳文章が『神曲』翻訳に着手する目に見えぬ布石となり、この古典を翻訳するうえでのひとつの大きな原動力となったのは否めないのではあるまいか。そこで本稿においてはほとんど知られていない『ウッズウォース追憶集』の内容を詳しく検討し、教育者とりわけ英文学者としての足跡、『神曲』との関連性を追及し、その意義を明らかにしてみたい。

I 教育者

まず、ウッズウォースの伝記を略記しておこう。メソジスト派教会の牧師に父をもつウッズウォースは1838年11月15日、カナダのマニトバ州、ブランドンに生れた。1907年、トロント大学ヴィクトリア校を卒業し新聞事業に従事していたが、伝道促進運動に共鳴し1908年来日、長崎市立商業学校及び第七高等学校で教鞭をとった。1911年、一時カナダへ帰国し、1913年、関西学院に來任した。1917年以後、専門部文学部部長となり、1934年、大学法文学部部長を兼任した。1919年、コロンビア大学から修士号、1936年、ヴィクトリア大学より博士号を授与せられた。1937年以後、京都帝国大学講師としてシェリダン、ゴールドスミス演



図1 One of his Former Students [Bunshô Jugaku] ed., *In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D. D.*, (Kyoto: Privately Printed, 1952), frontpiece.

劇、アーノルドの詩などを講義した。1939年2月6日、脳溢血により逝去した。(図版1) 詩人で英文学者の竹友藻風(1870-1954)は、「先生は品性の高い方で、高邁な理想と謙遜な態度を以て終始せられた」⁴⁾と追悼している。

『ウッズウォース追憶集』には教師と学生との交わりが活写されている。文学部設立25周年を記念する同窓会報にウッズウォースは「関西学院黎明期の思い出」を寄稿した—「1908年の夏、初めて関西学院を訪れた。当時、私は長崎で教鞭をとっていて軽井沢へ行く途中、神戸の友人のもとを訪ねた。その友人がまだ神戸郊外にあった学校に案内してくれた。友人が忙しかったため、私はひとりで摩耶山に登り、山頂からの絶景を楽しんだわけだが、やがて同じ山に頻繁に登り、広がる同じ海を見渡すことになろうとは夢にも思わなかった。1913年春、妻子をともなって東京からこの学院に着任した。まだ学校は小規模で、『高等部文科』という名称が大きすぎるような感があった。当時、吉岡美国(1862-1948)、松本益吉(1870-1925)、西川玉之助(1864-1954)、J・C・C・ニュートン(1848-1931)、W・K・マシューズ(1871-1959)、C・J・L・ベーツ(1877-1963)、R・C・アームストロング(1876-1929)などが活躍していて、私は学校の行政には関与していなかったため、時間が十分にあり、学生たちと親密な関係を築くことができた。妻とともに英語劇の指導に多くの時間をさいたが、こうした学生との交流こそ教室での授業以上に価値があるものと信じた。

同じ年に赴任してきた英文学の教授、佐藤清先生は他の同僚ともども拙宅に週に一度訪れ、イギリス文学の読書会を催した。こうした読書会を今も持続できておればと悔やまれる。8名が在籍した有名なクラスが最初の卒業生を輩出するわけであるが、私たち教師に勇気を与えてくれたものの、当初は重苦しい気分につつまれていた。学生たちは扱いにくかったが、いずれも従順で、いささか不可思議なやり方で英語を学んでいたようだ。次の2クラスはよくできたが、きわめて不規則でときには出席者が1名しかいないようなクラスも出現した。だから3名も出席者があると教室が狭く感じられたほどである。だが、このような小クラスゆえに大人数クラスではできない達成感があったのではないだろうか。学生たちとは親しく交流し淡路島、高野山まで遠足をもよおし、また六甲山で日永スケートを楽しみ、はるか遠く宮島まで出かけたこともあった。時間、余暇に十分すぎるほど恵まれていたのであろう。学生たちは外国人の子供と遊ぶのを好み、よく

甘やかしかンディを与えたりしたため、母親たちは子供たちが食べすぎ、不作法にふるまうのを困っていた。

第一次世界大戦は私たちイギリス人に大きな不安をもたらしたが、日本には繁栄をもたらし関西学院も新しいスタートをきれたのではなからうか。結果として、大量の学生たちが入学してきて、小規模な学校から大規模校へと変貌をとげた。とは言え、学校は理想どおりとなったとはいえないのではなからうか。青春をふりかえり良き日々であったと誰しも理想化しがちであるが、今日のような学院の姿を夢想するような者はいなかったであろう。25年前に設立された学院と今日のそれとは、場所、規模、行政、校風どの面をとっても、似ても似つかない。だが、学校の精神は今後とも変わることがないと信じている⁵⁾。(14-16)

学生との交流 では、学生にとってどのような教師であったのであろうか。ウッズウォースは助力を求めにくる学生をたえず鼓舞し、卒業生からの便りには必ず返信をしたためたという。後年、関西学院大学商学部で英語を講じ、P・B・シェリー研究者となる荻田庄五郎(1903-83)のウッズウォース回想をまず瞥見してみよう—「すこぶる記憶力が悪いため、ウッズウォース先生の姿や言葉がことさら記憶には残ってはいない。だからと言って接したことがまれであったのではない。関西学院高等部に在籍した四年間のうち、とりわけ二年生の時期には先生のまだ幼いお子様たちと遊ぶためほぼ日参していた。先生は紅茶碗をのせた盆を両手でかかえ子供部屋によくやってきた。学業にいそんでいたときも先生のもとをよく訪れては助力を求めた。先生のご友人たちへの紹介状を書いて頂いたりした」という。さらに「卒業後も交流は続き、仁川のご自宅を訪れ、心の安らぎを得ていた。私のW・H・デイヴィスの散文の翻訳、詩人P・B・シェリーの伝記執筆に対しても先生は助力を惜しまなかった」。前者のウィリアム・ヘンリー・デイヴィス(1871-1940)の散文とは、ウォーキング文学の傑作である『浮浪者の自叙伝』(*The Autobiography of a Super-Tramp*, 1908)であろう。後者について荻田庄五郎は寿岳文章の尽力により戦中から戦後にかけて二冊のシェリー研究書を上梓している。「私の豫てよりの念願はシェリーの伝記を書くことにある。各伝記者の記述を仔細に検討し、最も正確なる典拠によってDowdenのそれにも劣らぬ大部のものを書きたいものだ、と希望だけは大きく持っていた。何日実現するか分らないだけにこれを考えることは実に心優しい」。ウッズウォースをはじめとす

る研究に協力してくれた先輩、知友の助力に何よりも感激したという―「書物が出ることの喜び以上に、更に大きい喜びが私にあることを述べたい。それは、この研究を始めて以来、特に今度の出版に就て、人の心の暖かさをしみじみ味わせていただいたことである。貧しいながら、十数年此の仕事が続けることができたのも、先輩の暖かい心が常に私を鼓舞してくれたからである。地理的に恵まれない環境にありながら、不足勝ちにしろ種々な参考文献に目を通すことができたのも同様の恵みがあればこそである」⁶⁾、と。

敗戦にみまわれた英文学者は、戦争の惨禍を乗り越えて「よりよき社会」を構築していかななくてはならないと説く―「戦いに敗れ、生活に疲れ果てた日本国民が辿って来た過去三カ年間、これこそまさに、ある意味においては、『狂瀾怒涛』の時代であった。しかし一方において、新しい世代による精神的復興の気運が、澎湃として起こってきているにも拘らず、他方においては一旦虚脱した大衆の心が、暗黒へと堕ちて行くのを見る。大なる理想と希望とが、国民の全ての裡に生れるべき時なのだ。そして、それによって国民の生活が浄められ、高められ、やがてはよりよき社会が焼け野原の上に築き上げられねばならない時なのだ」⁷⁾。そして困難な現実を「克服し、理想に向って」歩みつづける指針を与えてくれる人こそ、「現実によって選ばれた詩人」、シェリーにほかならない。荻田にとって詩人シェリーは、まさに戦後という現実を克服すべき主導的な存在であった。

興味深いことに荻田が後者の研究書を世に問うた同じ年に、ウッズウォースの読書会でシェリーを読んでいた佐藤清（1885-1960）もシェリー研究書を出版している。その序文において、「シェリーは美の崇拜家であり、同時にまた革命家でもある。苦痛を征服することによって、新しい世界の実現を求めた詩人である」⁸⁾として敗戦後の現実を直視しようとする。「シェリーの詩篇は、ある時は静かに、やわらかに、ある時は、はげしく、高く、今なお筆をおいて瞑目する私の耳に、鳴りひびいてやまず」、「日本の真の更生のために、このささやかな一本を空しくならないようにと祈りつつ」⁹⁾とした。荻田、佐藤を問わずウッズウォースが教えた英文学は、決して机上の閑文字ではなく現実を直視できる精神の在り方を教示したものであった。

さらに荻田は言葉を加える。「どの学生以上にもまして先生と接していたわけだが、特別な思い出はない。それは先生が余りにも近い存在であったため、また親しみあふれる口調で接して下さるので、私も父親に

かえすような口調で返していたからだ。『木を見て森を見ず』という諺があるが、近くにいたときにはその偉大な存在に気づくことはなかった。ご逝去されても先生は私のなかに生きつづけたが、その逆も真であろう。先生の授業でカナダの詩人サム・ウォルター・フォス（1858-1911）の詩『道端の家』（“The House by the Side of the Road”）を学んだが、先生はその第3スタンザに歌われているような人であったという。

Let me live in the house by the side of the road,
Where the race of men go by ———
They are good, they are bad, they are weak, they are strong,
Wise, foolish —so am I.
Then why should I sit in the scorner's seat,
Or hurl the cynic's ban?
Let me live in my house by the side of the road
And be a friend to man. (17)

「道」を人生と解釈すれば、師弟の関係がよく浮き上がってくるのではないだろうか。1932年から37年にかけて荻田に宛てた9通の手紙が残っているが、そのいずれも学生に対する愛情にあふれたもので、はしなくもウッズウォースその人となりを伝えている（16-20）という。1933年5月初旬に書かれたウッズウォースの手紙は、荻田の贈物に対する礼状である。贈物にこめられた心づかい、師への敬愛の念にこころ打られたとウッズウォースは吐露し、さらに昨晚、訪問を受け一時間ばかり近況を伝えにきたふたりの卒業生のことを話題にとりあげ、彼らの人において何かを完遂したことよりも奮闘していることに限りない感銘を受けたと荻田に伝えている。師の学生への深い愛情は、学生を感化せずにはいられない。学生であった荻田から師への三通の手紙が師のもとに保管されていた。

1935年、ウッズウォースは帰休のため日本を離れた。三ヶ月経って無聊をかこつ荻田は、深まる紅葉とともに寂しさがつのっていったようである。「秋は日本では寂寥の季節であると言われるが、葉のなくなった枝にぶらさがっている紅い柿が紺碧の大空に深みを与える」と日本の秋の日を伝えようとする。だが、師の帰国の時期が分らず動揺をかくせないあまり、感情をつつみかくさず開示してしまった。「先生が二度と日本の地を踏むことはないと考えたら、いたたまれない気持ちにおそわれます。先生が関西学院から消えてしまうと考えるだけで寂しくてたまりません。こうした気持

は私だけのものではなく、関西学院の卒業生が等しく抱いているものなのです」(1935年10月20日、柏原町より)。そして、荻田は自らの誕生日に師への手紙を手向けた。季節の挨拶、近況の報告、ウッズウォース夫人と子供たちの様子を問い合わせ、「学院の前にあるご自宅の庭や子供部屋でお子様たちと遊んだ日々は、生涯のうちでもっとも美しい思い出です」と伝えている(1936年5月9日)。大学新聞で9月にウッズウォースが日本に帰ってくることを知った荻田は、歓びをかくせなかったようだ(1936年7月3日)。(17-18)

編集者として寿岳文章は、ウッズウォースの慈愛にみちた手紙に言及し書簡からにじみ出るその人間性を点描しようとする。学生や卒業生がウッズウォースから受け取った手紙は膨大な量にのぼり、そのいずれもが相手の幸福を願っていた。関西学院高等部に在籍していた寿岳は、昼間の授業を終えてから神戸市立葺合実業補習学校で午後4時から10時まで専任として生活の糧を得るため教えていた。「無理な生活や心身の疲れのせい、卒業年度の夏前から微熱が続く身となり、肺や肋膜に認められる浸潤をそのまま放置すれば、結核となるおそれがあると専門医に言われ、秋10月、勤務校の了解を得、気候の温暖な南紀の田辺で冬まで療養することにした」¹⁰⁾のであった。寿岳は近況を伝えるため、ウッズウォースへ絵葉書を送ったようだ。すると「君の端書を数日前に受け取った」とウッズウォースは寿岳に返信した。「海辺で静養しているのを聞きよるこぼしい気持でいる。自然には治癒力があるからきっと良くなるはずだ」と励まし、「君の健康が回復し学校にもどってくれるのを心待ちにしている。この静かな時間が精神の成長を育んでくれるであろう」(1921年11月10日)と結ばれている。卒業後も寿岳はウッズウォースと手紙による交流をつづけており、出す便りには必ず質問が含まれていたのだが、ウッズウォースは厭な顔ひとつせず、文学を話題にこのような手紙の交換を通じて精神的な交流を持続していくことこそ教師の歓びであると語っている。(20) 発した疑問に対してつねに明解な説明が返ってきたという。このように師弟の交わりを通して教師と学生のあいだには強い信頼関係が維持されていたといえよう。

臨終まで 1937年7月7日、日中戦争の発端となる盧溝橋で日本と中国の両軍が衝突した。11月6日、日独防共協定にイタリアが参加し、ウッズウォースが蛇蠍のごとく忌み嫌ったファシズムが日本中で台頭してきたが、彼は日本政府の無謀さに果敢にもたえた。困難あふれる年月になぐさめとなったのは、教育してき

た愛する学生たちがキリスト教の精神を遵守する姿であった。続く1938年7月5日、関西地方は未曾有の洪水に襲われた。学校近くの仁川の堤が決壊して浸水をおこし学生たちが修復のために動員されたのだ。ウッズウォース一家は長野県野尻へ避暑に行く予定であったが延期を余儀なくされた。

ウッズウォースは頑強ではあったが、1938年末、風邪をひき翌年1月30日軽い病のため伏せることになった。だが2月5日朝、手足の麻痺を訴え、6日午後5時55分、永眠した。9日木曜日、午後2時より葬儀が関西学院中央講堂で副院長、堀峯橋(1873-1945)のもとで行われた。弔問者にはウッズウォースが非常勤講師をしていた京都帝国大学から哲学者、西田幾多郎(1870-1945)、国史学者、西田直二郎(1886-1964)、英文科主任教授、石田憲次(1890-1979)の姿があった。(35-36)

亡き人の霊をなぐさめるため、ベーツ院長がレクイエム('The Passing of Harold Frederick Woodsworth')を詠んだと述べられているが、これはテニスの「砂洲を超えて」('Crossing the Bar', 1889)である¹¹⁾。この詩には、テニスの音韻への偏愛、奇を衒った表現、耽美な婉曲語法が全く影を潜め、効果的な暗喩で生から死への過程が簡潔にうたわれ、哀悼詩として品格と威厳をたたえている。この詩の選択はじつに適切である。

ウッズウォースの急逝は大学、教会を問わずかけがいのない損失を与えた。とりわけ神戸ユニオン教会では代理牧師の任にあたっていたため埋めがたいものがあった。余りにも熱心に働きすぎて体力を限界まで追いこんでしまったようだ。2年前、敗血症と血栓静脈炎を併発し身体を損ね、二度と以前の健康体にもどることはなかった。かつては体力を誇り、ウォーキング、ゴルフなどをたしなみ、身体を動かそうとはしない怠け者たちを運動するように叱咤していた。

ウッズウォースは温容、礼儀正しさ、誠実さ、篤実な信仰心のため、知人たちにすばらしい人柄を遺していったのである。その死が安らぎに満ちたものであるとしたら、人生は美にあふれていた。豊かな美意識をそなえていたため、言葉のもつ音感、リズムが人を惹きつけてやまなかったようだ。詩歌を愛し、みごとな鑑賞力で解釈を下し、学生に授ける力量をそなえていた。寿岳の意見によれば大学行政にあれば尽すことがなければ、英文学において作品を創作していたであろう。葬儀後、茶毘に付された遺骨は東京へと運ばれ、青山霊園の外国人墓地に埋葬された。2月12日、日曜

日午前11時、神戸ユニオン教会でH・W・アウトターブリッジ学長（1886-1967）の司会により追悼会が開かれた。（39-40）

寿岳は追悼録の結語として、次のような言葉で恩師の想い出を締めくくった—「私の心はウッズウォース先生の友愛、仁慈でしめられているが、私の貧弱な英語力ではとうてい謝意を表わすことができないので、1937年、先生と夏期休暇をともに過ごしたウォレス博士の言葉を借りたい—ウッズウォースは人間性を深め成長していった。とは言えまだ十代の大学一年生であった。謙虚で、振舞いは真面目で誠実さにあふれていた。そして友人たちと真なるもの、純正さ、正義、純粹、愛しさあふれる優美なるものを分かち合った。まさに無比なるキリスト教徒であり紳士（‘a very perfect Christian gentleman’）であった」（40）と早くから確立された人間性を総括したのである。

II 英文学教授

文学の鑑賞 ウッズウォースは文学の鑑賞や大学教育の理念を英文科が発行していた雑誌『アリエス』の創刊号に発表した。寿岳によれば、ウッズウォースはコヴェントリー・パットモア「玩具」、ルパート・ブルック「兵士」、ジョン・マックレー「フランダースの戦場にて」などといった「抑制のとれた哀愁」がにじむ詩を好んだようだ。教室ではテニソン、ブラウニングの詩作品を好んでとりあげたが、ウッズウォースはヴィクトリア朝中期に属していた頑迷な人間ではなかった。朝の礼拝で発刊間もないオルガス・ハックスレーの『ガザに盲いて』（1936）をとりあげたことがあると寿岳は回想し、出版されたばかりのヴァージニア・ウルフの新刊『歲月』（1937）をウッズウォースが論評しても何ら驚くにあたらないと論及している。

『歲月』論 1938年4月4日の午後、ウッズウォースの『歲月』論は1908年に開業されたトア・ホテルで開



図2 Virginia Woolf, *The Years* (London: Hogarth Press, 1937), dust wrapper, designed by Vanessa Bell.

かれた「神戸女性クラブ」の週例会にて発表され、『神戸クロニクル』（1938年4月7日）に活字となって公表された。それは「H・F・ウッズウォースのV・ウルフの小説論」と題され、「意識の流れ」という副題がつけられている。（22）

ウッズウォースが『歲月』（図版2）を講演のテーマに選んだのは、難解な作品であるにもかかわらず良書であると考えたからである。それは道徳性や物語的な関心からではなく、小説を知悉し芸術作品と考える作家ウルフによって書かれたからであった。よってこの小説の重要性は作家ウルフ自身にあるとした。本書には作家としての背景、個性が明確ににじみ出ている、として、ウッズウォースは、まず著者の伝記的側面から解説をはじめた。文人である父親レズリー・ステイヴンと小説家サッカレーの娘²⁾である母親との間に生まれたヴァージニアは、ストレイチ家、ダーウィン家とも姻戚関係にあるような家系のなかで、幼少時代にはJ・R・ローウェル、トマス・ハーディ、ジョン・ラスキン、R・L・ステイヴンソンなど多くの有名な文学者と接していた。姉とブルームズベリーで暮らすようになったヴァージニアは、リットン・ストレイチを盟友とする「ブルームズベリー・グループ」の中心的な存在となる。1912年、レナード・ウルフと結婚したヴァージニアは趣味として印刷を開始し、やがてホガース・プレスという出版社を起し、自らの作品群を同社から刊行するようになった。アメリカの外交官であり詩人のJ・R・ローウェルがヴァージニアの名付け親になり、「子供は親を体現したものであって欲しい」という銘を皿に刻印し贈ったが、ヴァージニアはまさにその言葉通りの人間となった。（22）教養を偏愛しすぎる、高踏的であるといったマシュー・アーノルドによく向けられた同じ批判がヴァージニア・ウルフにも当てはめられよう。よってウッズウォースによれば、ウルフの作中人物は誇張をまぬがれず、人生に対して余りにも過敏に反応しすぎるという。ウルフの小説はいずれも主観が横溢しているのではないか。作中人物の精神や主題の描写に意をつくそうとするため、作中人物は肉体から少々分離した存在となり、作品空間は現実の空間から遊離した結果になったようだ。ただ、心臓の鼓動が作品全体から聞こえてくるのが、まさに『歲月』の魅力にほかならない、とウッズウォースは結論している。

『歲月』の物語性 ウッズウォースはさらに論を展開していき、「意識の流れ」という文学手法をとりあげ、作者と読者が作中人物の内なる思考の流れに存在して

いく問題を注視していく。とりわけ作中人物が体験したことについていけない場合、作品は難解なものになる。人間精神は複雑であるが、感情はより複雑である。よってウルフの作品では意識の流れに追従してこうとすると読み手はたえず思考の流れのなかに参入していくことになる。そしてウルフは人間性に直接働きかけていくため作中人物はきわめて知的な教養人となるというわけだ。

小説家ウルフは人生を実感し、人生全体を把握しようとしているとする論を展開してウッズウォースは以下のように要約する。ウルフは物語作家としては偉大ではないが、作中人物への人間的な共感が欠乏しているため、読者は作中人物に愛情をいだくことはない。深い情感が宿らない芸術に偉大なものはありえないかもしれない。でもウルフが偉大な物語作家ではないという事実にはそれほど意味がないのではないか。というのも人生は物語ではなく主に日常に生起する出来事の記録からできているため、そのことをそのままに書いたままであるからだ。ウルフの作品に登場する人物は愛しい存在ではないにしても、その存在を受け容れることはでき、高い教養や知性から大いに裨益を受けることができよう。最後に『歲月』には祖国愛が横溢していて、独自の情熱的な筆致でもってその英国に対する愛を描いている文章が数多くみられる、と講演を結論づけた。(26)

テニソンの詩 ウッズウォースの英文学に対する素養をみるため、挿入されている図版は格好の手引きを与えてくれる。本書の16ページと17ページの間に挿入されているウッズウォース本人の手書きによる覚書である。ただ残念なことに編者のキャプションは誤っている。「ブラウニング覚書」ではなく「テニソン覚書」が正しい。言及されているクラリベルはシェイクスピア『テンペスト』、そしてスペンサー『神仙女王』(*Faerie Queene*, II, iv, st. 29)にも登場する、嫉妬に狂う恋人に殺害された無垢なクラリベルを連想させる。「クラリベル」はテニソンの詩集『詩集、主として抒情詩』(*Poems, Chiefly Lyrical*, 1830)に所収された作品で「リリアン」('Lilian'), 「マリアナ」('Mariana'), 「マデライン」('Madeline'), 「アデライン」('Adeline')などととも「女性詩篇」('lady-poems')と総称される作品群の一篇である。いずれの詩も音感にとむ詩語で成り立っており、「言葉の音楽」(word-music)を奏でている。「クラリベル—メロディ」は全三スタンザからなるが、その第一スタンザから「言葉の音楽」という特徴をみておこう。

Where Claribel low-lieth
The breezes pause and die,
Letting the rose-leaves fall:
But the solemn oak-tree sigheth,
Thick-leaved, ambrosial,
With an ancient melody
Of an inward agony,
Where Claribel low-lieth.¹³⁾
(クラリベル、深く眠りつき、
そよ風、とだえやむ。
薔薇の花弁落ち
厳かな榎の木、ただため息もらすのみか
葉を茂らせ、香り神々しく、
遠き過去の歌、
内なる苦悩の歌を口ずさみ
クラリベル、深く眠るところ。)

1行目の行末におかれた low-lieth が4行目の sigheth、8行目の low-lieth と押韻してるところからわかるように、あえて詩行のなめらかな流れを止めようとする。だがそれは同時に物憂い雰囲気をかもしだし、クラリベルという女性像に陰影を付与しようとする。ウッズウォースは「感情、形式の両面において若さゆえの欠陥が露呈してしまっている。愛、哀しみを経験したことがない若者が書いた詩である」として、「修飾が過剰で、テニソンは意味よりも音韻に酔ってしまっている」と批判している。さらに「この詩はテニソンの若書きで、最良の作品と考えるはならない」と解釈しているのは正鵠を射ている。たしかにこの詩は「テニソンの自意識から生れ、音楽的スタイルに習熟した」ものであろうが、ウッズウォースはクラリベルという生きた女性像が何ら表現されていないのを欠点としたのである。同時に、この批評はウッズウォースが詩語の音感にきわめて敏感であることを例示しよう。

ウッズウォースは詩を理解し、作ることもできるくらい韻文に対して堪能であった。同等に散文の鑑賞にもたけていた。17世紀イングランドの著述家トマス・ブラウン(1605-82)の散文を高く評価していたようだが、英国、サマセットシャーのグラストンベリーを訪れたときにもものした紀行文を、編者である寿岳はみごとな佳品と賛辞を呈し、ウッズウォースの文学的資質がよくうかがえると指摘している。グラストンベリーはアーサー王伝説が揺曳し修道院廃墟が遺っていて歴史が重層する場である。「ローマ遺跡にあふれるバースとグラストンベリーは地理上では数マイルしか離れ

ていないが、歴史的想像力にとむ訪問者が両地を訪れると何百年もの時の隔絶を感じるはずだ」とウズウォースはまず筆を起し、「伊達男ボー＝ブラメルのパースに対して、グラストンベリーは黄昏の遺跡のうえにアーサー王とその王妃、イギリス最初の教会堂を建てたセント・ジョウゼフ・オヴ・アリマシアの霊がさまよっている場である」と歴史的トポスに注目する。「グラストンベリーはわが主を知っていた人とその罪障深き女王、美貌のグィネヴィアとの埋葬の場として知られている。ふたりの墓は今日もお案内して見せられ、おそらくこれほど時代の古びたものとして、ひとかどの信憑性はあるのだろう。古いラテン語の碑文には『アーサー王このアヴァロン島の島に埋められて横たわる』（“Hic jacet sepultus rex Arthurus in Insula Avalloniha.”）と刻まれている」と述べているが、最後の“Avalloniha”という語に喚起され、ウズウォースはたちどころにテニソンの詩句「アーサー王の死」を想起する (33)―

[To] the island-valley of Avilion;
Where falls not hail, or rain, or any snow,
Nor ever wind blows loudly; but it lies
Deep-meadow'd, happy, fair with orchard lawns
And bowery hollows crown'd with summer sea.
(アビリオンの島の谷間
かしこには霰も雨も雪も降らず
風の音も高からず、奥深き牧場あり
幸は宿り、果樹園の墓地美しく
葉の生い茂る溪の上に夏の海めぐる)
〔「アーサー王の死」〔Mort d' Arthur〕〕

アーサー王と円卓の騎士たちの物語において過去と現在が往還する瞬間である。さらに、それは「ある土曜日の午後グラストンベリーにやって来た。そして教会に通ずる門が閉まる時間が次第に近づきつつあった。誰もが近所の野原でくりひろげられているラグビーの試合を見に行ってしまうていた。番人は気乗りがしないようで、現存する少数の建造物である『院主の厨房』（Abbot's Kitchen）に案内してから、足早に垣を攀じ上り勝負を見に行った。昔の記憶も現在の快樂に比べたら意味があるのか。しかし私は遠方の応援の声に一層静けさを加えたその静かな場所にただ一人残された。美しい草の上を歩き廻り、昔の偉人の墓を眺めた」という一節へと結びついていき、古代の戦いと現在のラグビー試合、アーサー王伝説に沈潜する「私」と球技

にしか興味をもたない若者などが過去と現在において対比される。そして無常な時の流れはすべてを飲みこみ、ただ闇だけが広がっていく。

長い影が折れ崩れた柱から落ち始めていた。それで私は古の教会の亡霊を離れて通りをさまよい、大きな丘 (tor) の麓まで来た。頂辺まで苦労して登ったが、その甲斐は十分にあった。というのは、西の空には大きな太陽が円形を削りつつあったように沈みつつあって、東には黄色い月が昇りつつあったからである。私は果樹園や古い町にさす夕陽を眺めて、降りる気がなくなり逡巡していた。古い石塔には人影がなかった。番人がいたとしても、やはり勝負を見に行っていたのだろう。グラストンベリーの最後の院主が1539年にこの塔で処刑され、当時の習慣に従って、身体は四つ裂きにされ、頭は僧院の門の上に曝された話を思い出した。寒い風が吹きはじめ、古い塔のまわりでうなりをあげていた。太陽はすでに沈んでしまい、黄昏は深まりつつあった。(34)

歴史、自然、人間を描いたこの随想に注目したのは寿岳文章のみではなかった。石田憲次もまた「ウズウォース氏の遺稿集 [『ウズウォース追憶集』] の中に、グラストンベリー訪問の思い出を語った一文が収められている。さすがに個人的筆触の普通の案内書には見られないものがある」⁴⁾と賞揚している。このようにウズウォースはイギリス文学を深く理解し、またその富を学生に伝えることができた有能な教師であった。

Ⅲ ダンテ『神曲』の翻訳

寿岳文章にとって、ウズウォースは敬虔なキリスト教徒であり、イギリス文学を指導してくれる有能な教授であったが、何よりも自らの人間性を全身全霊で受けとめてくれ、しかるべき助言を与えてくれる人間としての範を十全に示してくれる存在であった。精神が疲弊し静養している学生である寿岳に情愛に満ちた声をかけ、精神の危機を救ってくれた先生でもあった。

テニソンの詩を深く解釈し、文学的想像力でもって過去と現在を自由に往還し、しなやかな文体で自らの心情を表現できるすぐれた教師でもあったが、寿岳に対してはそれ以上の存在であった。教師が文学の知識や技術を学生に教えるという一方的な関係ではなく、両者のあいだには人間としての信頼関係があった。こ

の人間関係が樹立したとき、学問における先行者たる師と指導される側の弟子との関係、つまり師弟関係が初めて成り立つのである。寿岳はウッズウォースを「私にとっては、いちばん慕わしい恩師」として尊敬したが、『ウッズウォース追憶集』には師と学生をめぐる師弟愛が横溢している。換言すれば、この追憶集は師弟愛の書としても認められよう。

では、寿岳文章はこの師弟愛というテーマを自らの文学的営為のなかでどのように検討して、展開していったのであろうか。

生涯を通じて寿岳文章は多くの師にめぐまれた。そしてその学恩を一生忘れず、精神的な糧として大切に思っていた。学者としての始点にあって出版した『キリアム・ブレイク書誌』（ぐろりあ そさえて、1935）は初期の大きな業績であるが、出版書肆となる社主、伊藤長蔵（1887-1950）への紹介から始まり和紙研究会の設立、参加に至るまで、新村出（1876-1967）はまさに寿岳の人生の師といえる。追悼文のなかで、「もっとも親身な恩恵をうけたのは新村出先生であった」と述べてはばからなかった。

私は京大文学部学生するとき、言語学ではなく、英文学を専攻し、石田憲次先生やエドワード・クラーク先生にも親近したが、冒頭にも述べたように、在学中はもとより、京大を出てからも、学問と人生の両面にわたって、最も親身な恩恵をうけたのは新村先生であった。それは、先生からいただいた書簡の夥しい数からも言えることである¹⁵⁾。

現在、寿岳文章から新村への書簡、新村から寿岳家への書簡はいずれも重山文庫に保存されていて、前者については約115通、後者は約470通が保管されている。確かにこうした書簡の多さは、両者の交流が密であったことがうかがえよう。

新村出から知遇を得た頃、1927年、寿岳は柳宗悦（1889-1961）、山宮充（1890-1967）と協力して京都博物館でブレイク百年忌記念展を開催した。その出品目録の口絵に柳と協議を重ねてブレイクのダンテ『神曲』の挿絵「煉獄山を攀じ登るダンテとウェルギリウス」を選んでいるのはじつに興味深い¹⁶⁾。（図版3）ブレイクの挿絵に対応する『神曲』本文は、師弟の関係をよく表わしている。

われらただ二人、導師をさきに、私はしりえに、攀じ登ったかの岨道は。



図3 Milton Klonsky, *Blake's Dante: Complete Illustrations to the Divine Comedy* (New York: Harmony Books, 1980), p. 100.

ひと、足をサンレオへ運び、ノーリに下ることはできる、ピスマントヴァを頂上へ登ることはできる、ただ足を便りに。しかしここでは飛ばねばならぬ、すなわち、私に希望を与え、私には光明そのものであったかの導者に随順し、疾き翼、大願の羽をうちひろげて。

われらは岩の割れ目を攀じたが、両側の壁面ひしとわれらに迫り、下なる地は、行くに足ばかりか、手も求めてやまず。

高い絶壁の上端に出、眼を障うるものなき斜面に立ったとき、「わが師よ」と私の言う、「われらの取るべき道は？」

答えて、師、私に。「一步も下へ向けず、わたしに従い、この山をひた登りに登れ、道よく知る者のわれらに現わるるまで。」¹⁷⁾

師ウェルギリウスはダンテにとって望みであり、光である。寿岳のダンテ『神曲』翻訳は、村上博輔（1865-1926）、新村出、大賀寿吉（1870-1936）、ロレンス・ビニヨン（1869-1943）、石田憲次などの師の導きにより成就したものである。ケアリーの英訳による『神曲』は関西学院高等部とき、寿岳が早く購入した洋書であった。「神戸時代、最も早く求めた書物の一つに、オックスフォード大学出版局版、ヘンリー・フランシス・ケアリーの英訳神曲があった。私が幾度か通読を企ててはなし得なかったのは、今にして考えると、作詞の才にもめぐまれていたケアリー自身の長所が、どうかすると裏目に出、ダンテとの距離をひろげ、ダンテの思想に忠実であろうとの努力にもかかわらず、神曲翻訳の作業では、却って禍したのではなかったか。私はケアリーを捨てて、次の機熟するのを待った。その間に、詩聖の六百年忌がめぐって来、村上博輔という篤学の聖職者教授から、ダンテの生涯についての、



図5 One of his Former Students [Bunshō Jugaku] ed., *In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D. D.*, (Privately Printed, 1952).

献呈の辞がしたためられた。従軍後、疲弊して復員した増野を寿岳は自らの書齋にまねきいれ、ギルの翻訳をすすめた。「終戦の年の秋に、軍隊呆けた上に罹災で住居も蔵書も一切を失って、漂然と向日庵をお訪ねしたとき、先生はあの湖の底のように静かな書庫を私に開放して、小半日のあいだ書物の香りを嗅ぐことを許して下さった。私がエリック・ギルの書物を初めて手にすることが出来たのが、そのときだったのである」²⁴⁾と増野は記している。ここにも書物を介在させた師弟愛がみられるのではなからうか。

結びにかえて—向日庵本と和紙

寿岳文章が『ウッズウォース追憶集』(図版5)を何ゆえに向日庵本として出版する必要があったのであろうか。最後にこの疑問に答えておきたい。

本書の成立についてまず確認しておこう。ウッズウォース死後、カナダへ帰国した未亡人から亡き夫の伝記を「切望」されて、「遺稿や友人・弟子の追悼文を中心とする伝記をつくることになり、私とその責任を負った」²⁵⁾という。こうした遺稿、書簡、追悼文を集めて編年体で編纂する伝記の形態はヴィクトリア朝英国でもっとも隆盛をみたが、今日でも亡き人を偲ぶため、追想をこめた小冊子を刊行する習慣がイギリスにはある。つまり、英文学者、寿岳文章にとって本書はきわめて自然な追悼文集でありえたわけである。そこで寿岳は300部を印刷し、遺族に100部を寄贈することを決め、メソジスト関係者から必要経費に補填するため一部5円の割りで予約を求めた。だが宣教師たちは微笑をうかべるのみで実際に協力はしようとしなかったので、やむなく1933年以来、自らが主宰していた向日庵本の一冊として予約者を募り刊行を企てたのだが、時局はすでに英文で書かれた敵国の出版物の刊行を許さなかった。予約金を募り、本文用紙、装幀材料も準備

できていたにもかかわらず、集められていた書簡、原稿類は筐底に秘めざるをえず、出版は1952年までまたねばならなかった。その間には12年もの年月が無為に流れていた。寿岳流に言えば、この無為の歲月こそ戦争に対する無言の抵抗ともとれようか²⁶⁾。

本書は最後の向日庵本として世に送り出されたわけであるが、書肆も兼任する寿岳本人には多大な経済的犠牲が強いられた。戦前から戦後への動乱の時代の物価は「三百数十倍にのぼり」、「印刷や製本の費用だけ一冊数百円の原価」へ高騰したからである。それでも寿岳は予約者からは不足分を追徴せず、さらに郵送費が一冊百円近くかかる書留便で刊行したばかりの本書を送ったという²⁷⁾。

書物による反戦 戦争のために出版延期を余儀なくされた精神的な傷は大きかった。従来、寿岳は書物によって反戦の意を表明することがよくあった。今では考えられないことだが、学会における書物展示が平和を再考する場になったのである。「私自身の関与したものでは、第二次世界大戦の危機が刻々と日本へも迫った年次に、関西学院大学で大会が持たれたとき、英語聖書の各版を集めて展示し、隣の神戸女学院でも、協賛の形で珍しい讚美歌集を出してもらった。その目録を作ったのは私だが、聖書を選んだことに平和への願いをこめての、一つの resistance でもあった。ところが、身をキリスト教プロテスタント系の学校に置きながら、大会の名において、英米二国に対し、日本の国策の正しさを声明する決議文を送ってはどうか、などと言いだす会員もおり、私をうんざりさせた」²⁸⁾。寿岳が言及している学会は関西学院大学中央講堂と神戸女学院講堂で1936年10月6・7日に開催された日本英文学会の第9回大会を指している。すでに同年7月6日に日華事変(日中戦争)が勃発していた。ウッズウォースが亡くなった1939年、「輸入統制のため文学書の輸入はとだえ、英文学新刊書は書店にほとんどみられなくなった」²⁹⁾状態でもあった。

和紙を用いた理由 寿岳はさまざまな局面で向日庵本による戦争に対する反対の姿勢を語っているが³⁰⁾、向日庵本には「特別に手漉きさせていた和紙の本文用紙」が用いられた。ただ、和紙を使用した理由を工芸的な審美性の観点のみから考えてはならない。寿岳が手漉き和紙の実態を調査するため、全国の紙漉き村を訪れ、つぶさに観察したところから見えてきたのは、紙は自然から生み出されるものであるという事実であった。

すでにひしひしと戦争の暗い影がせまっていたけれど、一九三六年から三九年まで、私と妻とは冬を中心とする農閑期に、主として障子紙や傘紙を漉く農山村の実態をしらべるために、日本全国を旅行いたしました。バスはガソリンのかわりに木炭を燃料として走る不便な時代でしたが、紙漉き村へ行きつまでの道の周辺に展開する自然の美しさは、いつも目にしみ、心にしみ入りました。紙は水質を選びます。きよらかな水の流れていないと、よい紙は漉かれません。江戸時代このかた、高知県の仁淀川流域に製紙が盛んとなったのも、西日本の最高峰である石鎚山に源を發し、溪谷美で知られる面河村を過ぎ、高知県側にはいつて剣・鳥形の両山脈を横断し、蛇行に蛇行をかさね、全長一三〇キロにおよぶ長旅の末、土佐湾にそそぐこの川の、自然の恩恵があったからです。上流の深い山ふところには、紙を漉く材料となるミツマタやコウゾの木が茂り、なるほど土佐は紙どころだな、と国道三十三号線をゆく旅人に感じさせたものでした³¹⁾。

この引用した高知の紙漉き事情をリサーチした記述と重なる当該箇所を『紙漉村旅日記』に求めてみれば、「長曾我部元親が天正十五年から慶長二年までかかかって完成させ、のち元禄時代に重修した検地帳は、新旧合わせて三百六十八冊、侯爵家に完備しているが、史料として重要なのは言うまでもなく、又その当時に抄かれた紙の見本としても貴い。非常に強靱な楮生の厚紙で繊維なども太い。楮畑の記事も随所に見える」³²⁾とあるように、ここには和紙の歴史的観察までも含まれているのが理解できる。つまり寿岳が本文に和紙を用いたことには、人間と自然の共存、人間の精神、人々の生活、地域の歴史などが和紙に凝縮され反映していたからにはほかならない。

たしかに『紙漉村旅日記』の主旨は「日本に残存する手漉紙業の歴史地理的研究」であった。ただ寿岳の活動は紙漉きの現場のリサーチだけにはとどまらなかった。和紙産業を窮状に陥らした元凶をあばき、是正するため、寿岳は幅広く活動を開始した。そこで判明したのは、敵は外よりも「内」にあった事実である。行政の悪しき指導を正し、和紙の本質を内外に知らしめる広報活動も合わせて実践していったのである。

まことに、当時和紙の生産は、ほそほと残存しているに過ぎなかった。しかもそれを為政者たち

は、改良や奨励の名のもとに、改悪へと指導して恥としなかった。私は義憤をすら感じ、何が本当に美しくて正しい和紙であるかの、啓蒙運動にも乗り出した。海彼の有識者たちが、古くから和紙の美質に心ひかれていた事実に想到し、ときにはそれについての英文での著述に専念するとともに、国際文化振興会その他、外国人が聴衆である会合からの求めには進んで応じ、英語で和紙の話をした³³⁾。

寿岳の手漉き和紙を復活させる運動は自ずと行政への批判となって現れ、英文著述などでもって和紙のあるべき姿を説いたのである。では何が寿岳をそれほどまでに和紙への情熱を駆り立てたのであろうか。それは、「亡びてはならないものが眼前で亡びようとするのを見るに忍びず、無感覚・無反応な為政者に声を大にして呼びかけ、世論をもりあげ、和紙復興に寄与したい」という強靱な一念が突き動かしていたのであった。和紙保存への啓蒙活動を半世紀つづけた寿岳には依然として衰えない気概が燃えていた—「半世紀にわたり、和紙の美と用とを説き続け、その復興に心砕いてきた私の熱意は報いられたであろうか。すぐれた文化財である和紙は、外国人のいつくしみを受けるよりも前に、私たち日本人自身の手と心で、暖かく護持されねばならぬとする私の信念は、当時の為政者に、少しでも通じたであろうか」³⁴⁾、と。向日庵本が和紙を執拗に求めたのはかかる信念があったのである。

向日庵本と和紙 1943年に刊行された『和紙の美』に続く随想のなかで柳宗悦は寿岳の向日庵本、とりわけ使用された和紙について、「同[寿岳文章]君の向日庵本は、その道の人々には既に熟知されているところ。それらの本に幾種かの優れた和紙が用いられた。和紙への敬念と情愛とが背後まで濃く動いていることは、同君の学問を一段と確実なものにしている基礎である。とかくただの考証家に墮している他の学者たちと、はっきりと区別されていい存在である」³⁵⁾と指摘しているが、「和紙への敬念と情愛」が寿岳の学問を構築するうえで、大きく寄与してる、という。この実践をとまわらない学問は机上の空論であるとする柳の指摘は寿岳の学問のあり方を考える上で無視できない。

ここで『ウッズウォース追憶集』の本文に和紙が使われた理由を具体的に考えてみたい。追憶集の本文用紙は鳥取県で紙漉きをしていた塩義郎しおよしろう(1926-2008)の手になるものであり、その事実は追憶集の最後の頁(53)に明記されている。塩と寿岳の結びつきは柳宗

悦を介在させていた。1949年、塩は妙好人、源左の調査にきて願正寺に約1ヶ月間滞在していた柳と出会い、紙漉き和紙の本質に開眼するところとなった。塩にとっては和紙の「用」しか眼中になかったのだが、柳によって和紙の「美」を教えられたのである。同時に柳から法然上人の五念門の教え、つまり礼拝、聞法、読経、観察、念仏を教示された。念仏を忘れてはならないが、他の教えは従としてもよいという。塩はこの教えを紙づくりに応用した。楮、三桎、雁皮という自然の主材料は何ら加工せず生かすことを絶対視するかわり、製造の過程は二次的に考え合理化しても何ら問題はないという結論に達したのであった。手漉き和紙から機械漉き和紙への移行である。1955年、塩は紙漉き機械を導入した。黒谷和紙組合長であり『紙すき村黒谷』(1970)の編者である中村元と交わした寿岳の発言に塩の製紙法が言及されている。

寿岳 山根[村]に塩さんというアイデア・マンがおりまして、この人が非常に力の省ける、しかも能率の上がる紙を作っているんですね。中村さん、ごらんになったですか。

中村 はあ、機械漉きのあわせ。

寿岳 あれに鳥取民芸協会の吉田璋也さんが力を入れてバックしている。ただしあれが、その町や村の伝統を作るまでには、ひまがかかるでしょうけれども³⁶⁾。

民芸運動の推進者であった吉田璋也(1888-1972)は鳥取市内の開業医で柳に妙好人、源左の情報をもたらした人物である。源左は鳥取県気多郡山根村の農夫、足利喜三郎(1842-1930)という人物で、信仰篤く、言行は僧にも勝るものがあつた。前述したように柳宗悦は源左について詳しく知りたい念願を抱き、山根村を訪れて、源左の故家の前にある願正寺に滞在し、記録を調べ、村人から源左の話を採用した。それは『妙好人因幡の源左』(大谷出版社、1950)という編纂本にまとめられたが³⁷⁾、その限定版には塩義郎の和紙が使用されている。

『ウッズウォース追憶集』の本文に使用されている塩が漉いた和紙はこのような経緯を経て寿岳のもとへもたらされたものであつた。つまり、寿岳は手漉き和紙の製造を継承しようとしている者を支援すると同時に師ウッズウォースへの敬慕の念をこめて、和紙のなかへ織り込みたかつたのである。ここにも再び師弟の物語が形成されつつある。

注

- 1) 寿岳文章は向日庵本の出版にさいしてその意義を説く「向日庵発願記」(昭和7年)を発表した。「到着はやがて出発である。雑誌『ブレイクとホキットマン』は休刊の已むなきに立ち到つたけれども、胸に溢れる思いを何かの形に盛ろうとする私の欲念にはいささかの退転もなく、少数ではあろうがしかし熱意ある読者の力のみを頼りにして、私はここに私版刊行の事業を発願した。著者に詔うことなく、読者に阿ることなく、射利主義の流れから高く遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装いを与え、思想と工芸との二つの世界を密に結び合わせようとするのが私の願ひである。この私版は、太陽の彼岸を求めてやまぬ向日葵を歌つたブレイクの詩と、同じくその花を愛した画家ファン・ホッホに因んで向日庵と名づけられた。そうして上に掲げた茶の葉の紋が、今後向日庵私家版本の題扉に、装幀に、また新しく紙が漉かれる場合にはその漉入に用いられる標識である」と記している。大賀寿吉への書簡に刊行当時の状況が伝えられている。「拜啓 ダンテ文献について早速詳細なる御知らせをうけ、感謝に耐えませぬ。愈々御壮んなる意気を拝し、小生等は発奮を覚えます。前に刊行したブレイクの『ゆりぜん書 [唯理神之書]』は、申込数が出版数よりも多かりしたため、心にかかりつさしあげる事ができませんでした。今後は一本を必ず贈呈するつもりでおります。Songs of Innocence (無染の歌)の複製が近くできます。いろいろと御高批を得ば幸甚に存じます。今の仮寓では、家族と書物とが住むにどうにも場所がなくなり、柄にない願ひを起し、新京阪沿線西向日町にささやかな土地を求め、茅屋を新築する事にいたしました。この五月の末にはできあがるかと存じます。大阪より便宜の土地につき、季候のよき折、御光來を得たく楽しみにしています。この家は向日庵と名づけます。尚、私版刊行についての縁起めいたものを□□しましたから、一枚ここに同封してお目にかけてます。御伺いしたいと思ひながら、とみに忙しくてその機なく、残念に存じます。今日はとりいそぎ御礼まで。一月八日 敬具 大賀壽吉様侍史 文章」この書簡は赤井規晃氏(大阪大学付属図書館司書)のご教示による。記して謝意を表わしたい。
- 2) 研究ノートとして、森田由利子「約束の書物が語ること—『ハロルド・フレディック・ウッズウォース博士追憶集』」『エクス 言語文化論集』(関西学院大学経済学部、第11号、2019)、pp. 231-49. がある。
- 3) 寿岳文章「わがことながら—十二年ぶりにつくりあげた約束の本」『壽岳文章書物論集成』(沖積社、1989)、p. 927. 寿岳文章「『ウッズウォース博士追憶集』刊行記」『日本古書通信』第18巻15号、(1953年10月15日)、p. 7.
- 4) 竹友藻風「Woodsworth 先生を懐ふ」『英語青年』(1939年3月15日号)、p. 370.
- 5) One of his Former Students [Bunshō Jugaku] ed., *In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D. D.*, (Privately Printed, 1952), pp. 14-16. 本書からの引用は本

- 文のなかに括弧内でページ数をしめすものとする。
- “The classes were so small that there grew to be a very intimate relation between teachers and students. We knew all the students in those days and they were often in our homes. English plays were quite frequently performed and I can remember one in which Professor Imada made a fine Macbeth. When the student who was playing Lady Macbeth came in his face was so thickly covered with white paint or powder and he looked so ghostly that the audience burst into a roar of laughter quite upsetting the performers.” H. F. Woodsworth, ‘The Recollections of Our Literary College’, 『文学部回顧』 (1930), p. 282.
- 6) 萩田庄五郎『シェリイ研究』(研究社, 1943), p. 1.
 - 7) 萩田庄五郎『シェリイ愛と詩の生涯』(国際出版社, 1949), p. 1.
 - 8) 佐藤清『シェリー』(世界評論社, 1949), p. 1.
 - 9) *Ibid.*, p. 2.
 - 10) 寿岳文章「反骨の系譜」『自伝抄』第8巻, (読売新聞社, 昭和55年), pp. 272-73.
 - 11) “Tennyson said to W. F. Rawnsley that he ‘began and finished it in twenty minutes’ (*Nineteenth Century* xcvi [1925] 195). It had been in T.’ mind since April or May 1889, when his nurse suggested he write a hymn after his recovery from a serious illness (J. Tennyson, *The Times*, 5 Nov. 1936.”, Christopher Ricks, ed., *The Poems of Tennyson* (London: Longman, 1969), p. 1458.
 - 12) これはウッズウォースの誤りである。サッカーの娘ハリエット・マリアン (1840-75) はレズリー・ステイヴンの前妻であり, ヴァージニア・ウルフの母はジュリア・ステイヴン (1846-95) である。家系についても誤解している。
 - 13) Christopher Ricks, ed., *op. cit.*, p. 181.
 - 14) 石田憲次『英文学風土記』(研究社, 1972), p. 130.
 - 15) 寿岳文章「恩師の面影をしのぶ」新村猛編『美意延年—新村出追悼文集』(1981), p. 161.
 - 16) ダンテ, 寿岳文章訳『神曲 煉獄篇』(集英社, 1987), p. 40.
 - 17) *Ibid.*, pp. 38-41. ラスキンのダンテに関する一節も寿岳の脳裏にあったのは想像にかたくない。“The fact is that Dante, by many expressions throughout the poem, shows himself to have been a notably bad climber; and being fond of sitting in the sun, looking at his fair Baptistery, or walking in a dignified manner on flat pavement in a long robe, it puts him seriously out of his way when he has to take to his hands and knees, or look to his feet; so that the first strong impression made upon him by any Alpine scene whatever, is, clearly, that it is bad walking. When he is in a fright and hurry, and has a very steep place to go down, Virgil has to carry him altogether, and is obliged to encourage him, again and again, when they have a steep slope to go up, —the first ascent of the purgatorial mountain. The similes by which he ascent of the purgatorial mountain. The similes by which he illustrates the steepness of that ascent are all taken from the Riviera of Genoa, now traversed by a good carriage road under the name of the Cornice; but as this road did not exist in Dante’s time, and the steep precipices and promontories were then probably traversed by footpaths which, as they necessarily passed in many places over crumbling and slippery limestone, were doubtless not a little dangerous and as in the manner they commanded the bays of sea below, and lay exposed to the full blaze of the south-eastern sun, they corresponded precisely to the situation of the path by which he ascends above the purgatorial sea, the image could not possibly have been taken from a better source for the fully conveying his idea to the reader: nor, by the way, is there reason to discredit, in *this* place, his powers of climbing; for, with his usual accuracy, he has taken the angle of the path for us, saying it was considerably more than forty-five.”, John Ruskin, *Modern Painters* (London: George Allen, 1888), III, pp. 243-44.
 - 18) 寿岳文章「神曲改訳の作業を了えて」ダンテ『神曲 天国篇』(集英社, 1987), pp. 319-20
 - 19) 寿岳文章「邦訳『神曲』への道」『現代詩手帖』第29巻7号 (昭和61年7月)。
 - 20) 「ここで, 明治以来, 苦しい営為を重ねてきた『神曲』の翻訳者たちや, ダンテに強い関心を寄せてきた者たちが, 主としてキリスト者であったことを思い起こす必要がある。山川丙三郎然り, 中山昌樹また然り, そして翻訳者ではなかったが大賀寿吉もまた神学校の出身者であった。さらに, わが国において最も早く『神曲』の魅力を説いた内村鑑三を始め, 戦時下に大学を追われ市井にあって本格的な『神曲』講義を続けた矢内原忠雄に至るまで, この分野でキリスト者たちの果たした功績は, あまりにも大きい。そういう大勢のなかにあつて, 寿岳文章氏の占める位置はまさに特異だ。いま, 寿岳氏のダンテに対する思い入れだけを, 私は語ろうとしているのではない。寿岳訳『神曲』がもつ文体の新しさは, まさにキリスト者に対する仏教者の姿勢にある」(河島英昭「翻訳の理想と現実—寿岳文章訳『神曲 地獄篇』をめぐる」『叙事詩の精神—パヴェーゼとダンテ』(岩波書店, 1990), p. 278.
 - 21) 寿岳文章「書物の愉しさ」『日本古書通信』310号 (昭和45年2月)『寿岳文章書物論集成』(沖積社, 1989), pp. 734-35.
 - 22) 寿岳文章「邦訳『神曲』への道」
 - 23) ダンテ, 寿岳文章訳『神曲 地獄篇』(集英社, 1987), pp. 140-42.
 - 24) 増野正衛「訳者あとがき」エリック・ギル『衣裳論』(創元社, 1952), pp. 231-32.
 - 25) 寿岳文章「わがことながら—十二年ぶりにつくりあげた約束の本」『壽岳文章書物論集成』(沖積社, 1989), p. 927.
 - 26) 同じような文言が『日本におけるエマソン書誌』の「序文」にみえる。“The publication of the book which ought to have been done by the end of 1936 at the latest

was delayed through some unavoidable circumstances chiefly personal. Then occurred the China Affair and the jingoistic Japanese government began to show a strong anti-Anglo-Saxon bias, which attained its zenith upon the outbreak of the second World War, a deplorable affair which put a ban on every attempt to promote the peace of the world by introducing Western culture into our country and made a lawful publication of such a pro-American bibliography totally out of the question. I had to count myself among those ministers who only stood and waited. Hence this long delay in publishing.”, *Bunshō Jugaku, A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935* (Kyoto: The Sunward Press, 1947), p. viii.

- 27) 「わがことながら一十二年ぶりにつくりあげた約束の本」 *op. cit.*, p. 928.
- 28) 寿岳文章「思い出を一つ二つ」『日本英文学会五十年小史』(日本英文学会, 1978), p. 133.
- 29) *Ibid.*, p. 174.
- 30) 「いまふりかえてみると、私が向日庵本作成に情熱を注いだ期間は、日本各政府が英語や英文学の学徒を国賊のようにいいたし、大学の英米文学科がつぎつぎととりつぶされた時期にあたる。その間私は、こつこつと十数冊の限定本づくりに励み、熱心な読者に

直接頒布した。出版法の規定からすれば、内務省への納本が義務づけられていたけれど、私はあえて納本しなかった。出版の自由を当然とする私の信条の、国家体制へのささやかな反抗である。」寿岳文章「わが『書物』の思い出」『壽岳文章書物論集成』(沖積社, 1989), p. 933.

- 31) 寿岳文章『自然・文学・人間』(新日本出版社, 1973), pp. 11-12.
- 32) 寿岳文章, 静子『紙漉村旅日記』(明治書房, 1945), pp. 259-60.
- 33) 寿岳文章「和紙と私」寿岳文章編『紙』(作品社, 1988), p. 231.
- 34) *Ibid.*, pp. 238-39.
- 35) 柳宗悦「和紙十年」水尾比呂志編『柳宗悦 民藝紀行』(岩波文庫, 1986), p. 135.
- 36) 寿岳文章『和紙の旅—時と場所の道—』(芸艸社, 1973), pp. 207-8.
- 37) 水尾比呂志『柳宗悦』(講談社, 1981), p. 136. 水尾比呂志『評伝 柳宗悦』(筑摩書房, 1992), p. 191, 260.

追記 本稿と拙稿「寿岳文章の青春—いかに人格は形成されたか」『向日庵』第3号(NPO 向日庵, 2020), pp. 50-73. は重なるところがある。